

よろこびの泉

わたし(イエス・キリスト)が与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

新約聖書 ヨハネ4:14

発行所 奈良県生駒市門前町七一四〇 日本ミッション
〒630-0266 電話〇七四三(七三)一七五四 振替口座〇〇九〇(一六六四)三番

発行人 ファアベイ・D
編集人 日本ミッション編集部

印刷所 〒350-0303 埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
新生宣教師印刷部
電話〇四九(二九六)〇七二七

一年分 送料共 九〇〇円
定価 一部 一八円



そば屋の軒先に干される唐辛子

中山道 妻籠宿

一言

河野 進

あたたかい一言

なぐさめの一言

思いやりの一言

ゆるしの一言

はげましの一言

小さい一粒でも

善い畑に蒔いた種は

幾十倍の実を結ぶ(マタイ13・8)

河野 進詩集「母よ、幸せにしてあげる」より



問 十五歳の双子の中学生です。双子の兄は健常でスポーツも勉強もよくできるのに、弟の僕は右足にハンディがあって走ることもできず、学校ではいじめられ、腹いせに母に当たり、家中のものを壊し、不登校になってしまいました。なぜ僕だけこんな体に生まれたのでしょうか。

答 周囲の人たちは健常者なのに自分だけ。しかも身近な兄弟の間で体に不利な条件を負っていると、いっそう惨めな気持ちになります。世間では、五体満足で、何の問題もなく生まれる事が幸せの第一条件で、ハンディキャップを負わされている事は、不平等で不幸だと決めています。

飛行機が空高く飛ぶためには、逆風が必要な事を知っていますか。ことに離陸するときは、強い向かい風の抵抗を翼に受けて初めて、目に見えない強力な揚力が生まれ、300トンものジャンボジェット機が急上昇して行けるのです。困難を持つ時、それをただ悪いことと捉え、何の努力もしないで悲嘆に暮れているだけなら、人生は敗北するだけです。どれだけ辛いことが降り掛かろうと、それを明るく受け止め、神様が特別な贈り物を私にくださったのだと捉える知恵が必要です。

キリスト教が最も厳しく迫害されたローマ皇帝の時代に伝道したパウロ(新約聖書の約半分を書いた人)は、生まれつき目が悪く、大きな文字しか読み書きができませんでした。日々命の危険にさらされながら、自分が伝道してクリスチャンになった人たちに「私は今こんな大きな文字で手紙を書いている」と、慰め励ましの手紙を送り、それが今聖書として、時代と世界を超えて読み継がれているのです。パウロが更に伝道のため、手紙を書くために、このハンディを取り除いてくださいと祈り続けた時、神様は「わたしの恵みは、あなたに十分である。……わたしの力は弱さのうち完全に現れる……」(コリント12・9)と言われ、弱さこそあなたが手紙を書き続ける力であると論されました。

あなたもハンディに心捕らわれず、生きる力を神様に求め、力強く人生を切り開いて生きてください。(児玉 博之)

親と子のしあわせ 400

私は、二一年前に東京から佐賀に来ましたが、主人は牧師であり幼稚園の園長もしています。園では毎年三月になると卒園児を送り出します。子どもたちの成長を、保護者の方と共に喜び、感動し、これから小、中、高、大学を経て、どんな大人になるのだろうかと思像し、神様の祝福をお祈りします。

ある時、二十歳過ぎの青年が幼稚園を訪ねて来ました。ちょうど私たちが赴任した頃の園児でした。「懐かしくなって来ました。園舎が新しくなりましたね。でもワンワンネット(遊具)は変わってない」と話し出しました。園長の主人は、話すうちに色々思い出し、お父さんの話などもしました。今彼は、東京で芸人を目指して頑張っているというのです。そして、「今から家へ久しぶりに帰ります。父に、もう少し今の生活を続けたいと話すんです」と、ちょっと緊張していました。主人は、お父さんと良い時間が持てるようにと励まし、彼のために祈った後、降り出した雨の為に傘を貸し、彼は帰って行

きました。その後どうなったのかはわかりません。

親としては、子供の夢を応援したいと思いつつも、堅実に歩んでほしいと願うのが普通かもしれません。彼もそのことはわかっているのです。でも夢をもう少し追いたいのです。その葛藤の中で、幼い時愛されて過ごした、楽しかった幼稚園にふと帰りたくなったのでしよう。

卒園生を送るときに「いつでも遊びに来てね」「遠くから応援しているね」と先生方は声をかけ、幸せでいてほしいと願う祈ります。たとえ在園当時の先生が幼稚園にいななくなっても、神様はいつも覚えておられます。

「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」(イザヤ49・15)

人生は、楽しく嬉しいことばかりではないけれど、あなたを愛して止まない神様がおられることを忘れないでほしいです。幼い日に一緒に神様に祈ったことを思い出してほしいのです。(相原 幸紀美)



*この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

深い迷いの森から

大阪府堺市 仲堃 昭子

夫と二人(後に三人)の子にも恵まれ、生活に不満はないものの、どこか物足りなさや虚しさを感じていた私は、「朝起会」や「エホバの証人」の誘いを受けて、一時は喜んでそれぞれの活動に入り込みましたが、決定的な救いの確信は得られませんでした。そんな私を見ていた夫が、友人のクリスチャンを紹介してくれて……



▲昨年、友人たちと訪れた止揚学園(滋賀県東近江市)にて。右から二人目が私

私は一九五二年八月、宮崎県高千穂町の山村に四人姉弟の三女として生まれました。貧しく慎ましい暮らしでしたが平凡に育ちました。家の前には川が流れ、四方を祖母、阿蘇九重の山々に囲まれた、美しい緑溢れる環境に育まれて暮らしながら、その大自然を造られた方がおられることも知らず、その方に感謝もせずにごまかしていたことは、勿体ない事だったと今は思います。

物足りなさの中から「朝起会」に

高千穂で高校を終えると上京し、三年間銀行に勤めたあと、夫と結婚。夫の大阪本社勤務が決まったため、夫の実家のある大阪・堺市に転居しました。その頃、丁度夫の母が体調を崩していた時でしたので、最初は夫の両親と同居しました。それからすぐに長男が生まれ、両親との同居生活にしんどさを感じていたときに長女の妊娠がわかり、それを機に、

なっていました。

救いの確信を求めたが

そんな時に「エホバの証人」の存在を知ったのです。私の家を訪ねてくれた方は、私の目に聖く正しく美しく見えました。最初は玄関での立ち話でしたが、私はその人の言うことにならずに物を感じるように、聖書(その内、その人が毎週私の家に来て、聖書)の団体が聖書と呼んで用いているもの)を開いたり読み物を見せて教えてくれるようになりました。その学びを通して、私は生まれて初めて天地創造の神の御名を知り、私の世界観、人生観、歴史観が一変したのです。私は何の未練もなく朝起会を辞め、この新しい教えに飛びつきました。しかし、学んでいく内にその期待と希望は、失望とあきらめに変わって行きました。それは、やがて訪れる神の裁きから救われる条件を、満たすことが出来ないことを知ったからです。正式なエホバの証人ですら救いの確信はありません。

私はここにこそ救いがあると思っ、こともちを連れて王国会館にも行っていましたが、正式にエホバの証人になりたいとも考えていません。ところが証人となるためには、会が発行する読み物を持ち、家々を訪問しなければなりません。それが出来ない私はいつまで経っても正式会員とは認められず、たとえ積極的に活動に参加して証人と認められても、救いの確信は得られない……。このジレンマの中で私は毎日悶々としていました。エホバの証人と関わって既に三年が経っていました。

無条件の愛に出会い

そんな私を、近くで、ずっと黙って見てくれていた夫が、ある日、高校時代の友人を紹介してくれました。その方は、当時津久野にある教会に通っておられたクリスチャンでした。その人はやはり聖書(前)に見せられていた物とは違う)を開いて、無条件の神の愛と、救い主なるイエス・キリストについて教えてくださいました。人類の罪を贖うためにイエス・キリストは十字架にかかり、私たちの身代わりとなって死なれたこと、そして三日目によみがえられたこと。天に昇って今も生きておられること。聖書に書いてあるこの福音を信じる者はだれでも救われて天国に入るこゝとが出来ると、何度も教えてくださいました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになられたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ3:16)「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(ローマ10:10)

私はそれまでの十数年間、心の平安と、人が生きていくための正しい道を求めて、あちこちさまざまでいたりました。良き妻、良き母、良き人になりたいと努力していたのに、やることなすことが全て裏目に出て、ついには孤立無援の状態になり、迷いの森に入ってしまったのです。そのころの私の状態は次の御言葉のようでした。

「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分で分からないのです。」(ルカ23:34)

近くの借家を借りて移りました。

夫と二人の子どもの四人の生活は楽しいもので、そこに何の不満があった訳ではありませんでした。ただ夫の帰りを待つだけの生活に物足りなさを感じていました。私は高校生時分から生きがいのようなものを求め、自分は何のために生まれ、何のために生きていくのかなど、よく友達とも話していました。

大阪に来て、近くに打ち解けて話せる友人や肉親はおらず、幼い子ども二人と多くの時間を過ごすだけの毎日に、むなしさを感じていたのかもしれない。そんな時に、「朝起会」を名乗る女性の訪問を受けました。その人のこやかな笑顔と優しい物腰に魅かれ、内容の理解は不十分でしたが、私もこの人のようになりたいと思っ、「朝起会」の活動に参加することにしました。

朝五時、近くの集会所に集まって会員の方たちの体験談を聞き、リーダーのような方の講話に耳を傾け、最後に全員で会が提唱する「五つの誓い」を唱和して六時に散会。いったん家に帰ります。それから家事をし、夫を送り出し、再度、近所の公園に集合して機関紙「宏正誌」の頒布活動をしました。私を最初に訪ねてくれた人のように家庭を訪問し、活動への参加を呼びかけ、お誘いし、読み物をおすすめしました。(読み物を買ってくれた人は少なく、ほとんどの人が自己負担での配布でした。)

しばらくはこの活動に生きがいを感じていたのですが、時間やお金を費やしているほどには目に見える成果がなく、段々と限界を感じるようになっていきました。在籍は十年にわたりました。

夫に感謝

あれから三十年。色々なことがありましたが、あの日いただいた平安と喜びは、今も心の中に豊かに燃え続けています。あの頃夫は、時々、走り回る私に注意を喚起してくれ、時には私の行くところに同行もしてくれて、道を間違わないよう心配してくれました。でも私は自分が納得するまで走り続け、深い森の中に入ってしまったのでした。そんな時、夫は最も確かな導き手を持ってきてくれたのです。そして今があります。黙って支えてくれ、いざというときに助けてくれた夫に本当に感謝しています。夫はまだクリスチャンではありません。いつの日か、夫と共に礼拝に出席できるようになりたいと心から願っています。あの頃引っぱり回してしまっった子ども(一男二女)たちは成長し、それぞれの生活をしています。その内の女の子の二人は、イエス様を信じて洗礼を受け、同じクリスチャンの道を歩んでいます。

全ての栄光を主に返ししつづ。
(堺市 チャペル・こひつじ会員)